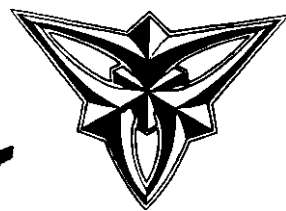




川高同窓会報



埼玉県立川越高等学校同窓会
〒350-0053 川越市郭町2-6 川越高校内

【同窓会】電話・FAX (049) 225-9071 (直通) <http://alumni.gnk.cc/kawagoe/>
【学 校】電話 (049) 222-0224 (学校) <http://www.kawagoe-h.spec.ed.jp/>

川越高等学校百十周年記念事業 「川越城図」 記念碑の贈呈



①平成23年10月22日に行われた除幕式の様子。右から新井孝次川越市教育長、川合善明川越市長、田中正同窓会会長、大野政己川越市立博物館長。

②雨中にもかかわらず120余名の同窓会員が参列した。

③除幕された「川越城図」記念碑。記念碑撰文を作成したのは山野清二郎氏(高12)。記念碑の右側面には「埼玉県立川越中学校・川越高等学校 創立百十周年記念」と彫られている。



目次

会長挨拶 会長 田中 正	2
校長挨拶 校長 松下幸夫	2
母校だより(一)	3
人事異動・転任挨拶	
「川越城図」贈呈式	4
くすの木俳句大会	4
秋季散策会	5
24年度案内・越生初雁会	
23年度報告・川越初雁会	
特集	
「同窓会の誕生とあゆみ」	6
定時制分校ものがたり	10
東日本大震災へ支援	12
各OB会・同期会の活動	13
高2回・高13回・川越初雁会	
初雁医会・野球部OB会	
吹奏楽部OB会・小川初雁会	
会員だより	15
故・浜野達男氏の寄付	
生徒動員令・畏友斉藤博氏	
母校だより(二)	16
文化講演会(滝澤民夫氏)	
SSH新たな五年始まる	
母校だより(三)	18
進学状況 部活動報告	
初代校長増野悦興の謎(十)	19
総会のご案内	20
事務局より・編集後記	20



ごあいさつ

会長 田中 正

会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

五月二十九日の同窓会総会で急遽、東日本大震災に百万円の義援金を寄付することを満場一致で可決し、当日の参加者からの寄付金とあわせ百一十一万円を川越市の「震災等支援費」に寄付することとし、川合川越市長にお渡ししました。ここ暫くの間は災害復興に向け国民が一丸となって立ち向かっていかなければならないと思います。また終身会費の納付につきましては、従来、同窓会会則で卒業後二十五年を経過した際に五千円を納付するという規定になっておりましたが、卒業後直ちに納付して頂くことに変更することにいたしました。これは平成二十三年度の卒業生から卒業時に入会金・終身会費等含め二万円を納付して頂くことになっているからです。本年度の終身会費の納入状況は極めて順調で、二月末現在、二〇八〇名の方々からの納付をいただいております。皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

九月三日に二十番目の初雁会として待望の川越初雁会が誕生いたしました。設立総会を氷川会館で百五十余名出席のもと盛大に開催いたしました。これにより川越高校の主要地盤にはほとんど初雁会が誕生し、同窓会の基盤は益々、強固な

ものとなりました。川越初雁会の今後のご発展をお祈りいたします。

十月二十二日、創立百十周年記念として川越城本丸御殿に記念碑を贈呈いたしました。表面に川越址図、裏面に山野清二郎氏(高12)の格調高い撰文が刻まれております。川合川越市長をはじめ多くの同窓生にご出席いただき、盛大に除幕式を行いました。その後、本丸御殿を大野政己川越市立博物館長に解説をいただき視察しました。散策会は川越初雁会主催で、喜多院コース(講師…松尾鉄城氏)、山崎別邸コース(講師…荒巻澄多氏)、氷川神社コース(講師…山野清二郎氏)に分かれて行いました。氷川会館で懇親会を行い有意義な一日を過ごしました。なお今年の散策会は十月十四日(日)に越生初雁会主催で行います。奮ってご参加下さい。

同窓会総会の記念講演は、川合川越市長(高21)に「地方自治の現場から」地方自治の現状と課題」という演題でご講演いただきました。市制運営の御苦労、将来展望等についてご講演をいただきました。

今年は吉野繁氏(高31) 日建設計・設計部門デザインパートナーに「634(ムサシ)を指して」という演題でご講演をいただくことになっております。

本年度も同窓会活動の活性化、母校教

育支援および地域貢献活動等に尽力したいと思っておりますので、会員の皆様のご

支援、ご協力をお願い申し上げます、ご挨拶いたします。



平成23年度を顧みて

校長 松下 幸夫

平成23年度の学校の様子について二点報告いたします。

まず、スーパーサイエンスハイスクール(SSHS)についてです。「知の融合」

をテーマに据え、既存の知の枠組みを超えた新たな学問分野を創出し得る科学技術系人材を育成するための教育研究をしてきましたが、平成22年度をもって5年間の指定期間を終了しました。

一年生を対象としたSSH基礎Ⅰの授業、ハワイ島実習などの課外授業、物理チャレンジなどの科学コンテストに参加し授賞、川越女子校などと合同での小中高連携科学教室の実施等々、どれもSSHの本流をいくものと自負しています。

これらの大きな成果を踏まえ更に飛躍充実させるために再度指定申請し、文部科学省から新たに平成27年度までの5年間の研究指定を受けることができました。

テーマに「知の継承」を新に加え、サブテーマを「サイエンスネットワークの水平展開と垂直展開」とし、これまでに

開発した教育方法などの普及、卒業後も視野に入れた系統的カリキュラム開発、関連機関や国、県との協力体制のあり方研究等々、ひとまわり大きな視点からの

取組を進めます。なお、本同窓会報17ページに取組の詳細な報告がありますのでご覧ください。

次に入学選抜についてです。本年から本県公立高校はこれまでの前期・後期の募集を一般募集に一本化し、学力検査が三月上旬になりました。義務教育の総まとめである中学3年生の3学期に落ち着いて学習に取り組むことが狙いです。

高校側にとっても2月の入試がなくなり授業日数の増加となりました。また24年度限りの措置ですが10学級となります。

この3月の県全体の中学卒業生数の増加状況により、県教委は県内の34校で臨時的に募集学級増を実施しました。川越市内では本校を含め川越女子、川越西、川越初雁の4校が指定されました。このため本校では24年度から3年間は全校で28学級約1120人の大規模となります。

施設の予備に余裕はない本校ですが教育水準の低下とならないよう工夫してまいります。

今後とも同窓会の皆様の熱い期待に応えられるよう、110年を超える歴史と伝統を持つ母校の発展のため、生徒・教職員一同頑張っております。

人事異動

新座高校（臨任）

一年間という短い期間でしたが、保健・体育の担当をさせていただきました。現役時代野球部に所属していましたので、野球部の顧問を努めさせていただきました。各種大会には、野球部OBを問わず、世代を越えて同窓会員の多くの皆さんが応援に駆けつけていただき感謝しております。残念ながら、期待に応えられず甲子園出場は逃したことをお詫び申し上げます。今後は、OBとして母校の活躍を支援していきます。



「川越城図」記念碑の贈呈

川越高等学校百周年記念事業である川越城本丸御殿保存修理工事の完成を祝す「川越城図」記念碑の贈呈式と除幕式为平成23年10月22日に行いました。贈呈式は、田中正同窓会長より川合善明市長臨席のもと川越市へ記念碑が贈呈されました。この「川越城図」については、川越市立博物館学芸員天ヶ嶋岳氏と共に選定にあたった松尾鉄城氏(高18・東京国際大学講師)より、川越城の全体像と川越高校との位置関係について解説していただきました。



この記念碑裏面にある撰文を作成された山野清二郎氏(高12・埼玉大学名誉教授、鎌倉女子大学教授)により朗々と解説していただきました。

「川越城図」裏面撰文

此処に城ありき。城は四〇〇年余の歲月、川越の地を治理し、明治の世、微睡に入れり。

明治三十二年春この城址に県内三番目の公立中学校設置さる。是れ則ち埼玉県立川越中学校なり。城の本丸御殿皆て武徳殿の名もて呼ばれ、学校と共に久しき時を閲したり。

昭和二十三年学制改革のもと、川越中学校は川越高等学校となり、校舎改築の折、武徳殿は教室ともなれり。平成二十一年学校は創立百十周年を迎え、時恰も当御殿は前年より修理期が訪れ、同二十三年三月竣工をみた。而して川越市は同二十四年市制九十周年の年に当れり。この佳き時節の中、我ら川越高等学校同窓会は城址と学校と川越市の恆久なる榮えを期し、茲に記念の碑を建て以て寿ぐものなり。

埼玉県立川越高等学校同窓会
(撰文 高十二回 山野清二郎)



解説する山野清二郎氏

第11回「川高くすの木俳句大会」のご案内

柴崎 育久(中48)

恒例の当俳句大会はいよいよ11回の開催の運びとなり、お陰様で同窓会の公式行事として定着いたしました。今回も末記のとおり開催いたしますので、ご家族をお誘いの上ご参加の程お待ちしております。

また月例の「くすの木句会」は毎月第一土曜日午後1時より川高同窓会小会議室で開催して居り、毎回松本旭大先輩(中35・俳誌「橘」主宰)と本阿弥書房社長の本阿弥秀雄氏(高18)の選と添削を頂いております。目下の夢は川高生が「俳句甲子園」に出場してやがて全国制覇することです。

スタートメンバーの一人栗田忠男氏(高1)が去る6月末急逝されました。小澤克巳先生(高20)に続く悲報で残念です。最後の6月の例会に投句された遺句を掲げ哀悼の意を表します。

野仏の手にひろはれし雨蛙
青田風吹き抜けゐたる中尊寺
●ご案内
日時 8月25日(土)
午後1時～5時
会場 川高図書館2階同窓会室
投句 夏・秋雑詠3句
(郵便葉書に楷書で記述)

投句先 〒350-0004 5
川越市南通町15-16

佐々木 新

投句締切 7月31日(火)消印有効
会費 投句3句に付1000円
を郵便小為替で。(在校生無料)

●第十回俳句大会作品集より

「卒業生の部」卒業年次順

ペタル踏み妻の墓訪ふ麦の秋

奥山 東興(中28)

丹田に力城下の高き天

松本 旭(中35)

行く水もとどまる水も緑さす

村田のぼる(中41)

鳥の跡さぐりし螢いまは遙か

木村 麗水(中42)

木曾馬の眼うつくし蕎麦の花

佐々木 新(中48)

万緑の一山世界遺産とよ

一言に身の振り決めし夕端居

柴崎甲武信(中48)

炎天に至福の笑顔羅漢像

五十嵐 甫(高3)

生命の謎解くロマン天高し

中村夢犀夫(高11)

幾許の言の葉通ひ遠花火

横山 正樹(高13)

節電を諸ふてをり星涼し

岡部つねを(高15)

一刷毛の雲早秋のかほかたち

遠藤 俊彦(高17)

姿見の中の襟足涼しかり

小林 幸二(高17)

鱧鮓や昼を過ぎたる部屋広し

本阿弥秀雄(高18)

十秒の駆けっこ競ふ日焼けの子

栗原忠梨風(高20)

それとなく簾の先の恋絵巻

勝浦 敏幸(高21)

また同じところ読んでる冷し酒

市川 英一(高23)

「在校生の部」

無機質な絵日記に咲く夢火花

山口 和輝(1A)

「地賞」

夜の蝉ノートを閉じて目を閉じて

小林 勇貴(1F)

「人賞」

向日葵に似合う人には夢がある

高波 俊介(1E)

届かない受話器のむこう夏の夜

石井健太郎(1C)

夏の夜会いたい会えないでも会いたい

岡田 健汰(1C)

黄金の光吸い込み育つ稲

三橋 洋貴(1F)

松茸飯僕の茸も召し上がれ

岩崎 紘治(1H)

秋季散策会

24年度のお誘い

「里山の自然を歩く」

七重八重花はさけども山吹の
実の一つだに無きぞ悲しき

太田道灌ゆかりの山里・越生は明治中期に町制が敷かれた古い町ですが、史跡も多く、道灌ゆかりの「山吹の里」をはじめ、里山の自然がそのまま遺されています。昨年は道灌の父「太田道真生誕六百年」も催されています。

近年とみに人気を集めている「越生七福めぐり」の寺社の一部なども散策コースに入れた、里山を巡る約4キロの散歩です。ふるってご参加下さい。

「散策会詳細」

一日時

10月14日(日)

午前9時45分集合

二 集合場所

越生中央公民館

越生町越生917(駐車可)

TEL 049(292)3223

東武越生線

JR越生駅より徒歩10分

三 散策会出発

午前10時15分

四 懇親会

午後1時

ニューサンピア埼玉おごせ

「武蔵の間」

五 会費

6000円

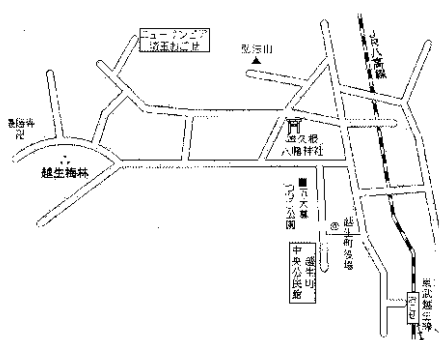
(同伴者4000円)

「散策コース」

越生中央公民館→五大尊→弘法山→津久根八幡神社→最勝寺

↓越生梅林→ニューサンピア埼玉おごせ

(注) 帰路はバスにて中央公民館経由越生駅まで送ります。



「特別解説者」

酒本忠雄氏(高6)・越生町史

編集委員

石川久明・越生図書館長

「主な見所」

●五大尊 五大尊とは、不動、

降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉の五大明王で、五体そろった明王像としては県内唯一の例です。

●弘法山 もとは高房山と書かれ「新編武蔵風土記稿」に絵で頂上からの勝れた眺めが紹介されている。越生七福神の一つである「弁財天」が祭られている。

●津久根八幡神社 彫刻は、江戸浅草の彫刻師・嶋村源蔵で、川越氷川神社本殿と同じである。この神社の獅子舞は見物である。

●最勝寺 源頼朝が児玉雲太夫に命じて建立させたと伝えられている。

土蔵の白壁に源氏の家紋「笹竜胆」が映える。

●越生梅林 九州太宰府から現梅園神社を分祀した際、菅原道真にちなんで梅を植えたのが起源と伝えられている。

太田道真・道灌父子は、心敬宗祇、万里らと越生の梅を愛でたと想像される。



里山風景

新井康之(高15)

23年・秋の散策会報告

川越初雁会

平成23年9月3日に発足したばかりの「川越初雁会」初の主催事業である。

これに先立ち「川越本丸御殿」保存改修を祝するため、同窓会の地域貢献事業である「川越城図」の記念碑贈呈式を行った。

雨の降りしきる中、この贈呈式と散策会に120名を超える方々が参加された。幸い贈呈式のときは雨がピタリと止んだ。

贈呈式後、新装となった「本丸御殿」の見学から散策会はスタート、説明は大野政己川越市立博物館長にいただいた。



大野政己館長の説明

その後、再び降り出した風雨のなか、3班に別れて散策となった。1班は松尾鉄城氏(高18)

の先導で「喜多院」に向かい、「春日局の間」などを見学した。2班は荒牧澄多氏(高27)の先導で「旧山崎家別邸」を見学、川越市の私的な迎賓館であり、大正時代の雰囲気を感じ出している。3班は山野清二郎氏(高12)が率いて「氷川神社」周辺を散策。各班とも悪天候のなか、精力的に行程をこなしていた。

各所に分かれて散策を終えた参加者は、再び氷川神社併設の「氷川会館」に集結、懇親会となった。

関口一郎川越初雁会会長の挨拶、石山豊氏(中46)の乾杯で和やかに会は進み、途中、宮崎雅好氏(中42)の力強い挨拶もあり、応援団のもと校歌・応援歌となり、盛会のなか、お開きとなった。



川越高校同窓会秋季散策会



関口一郎会長

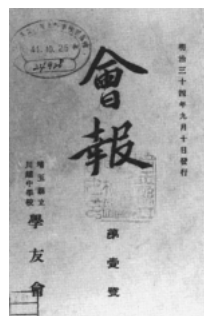
加島篤人(高34)

特集

同窓会の誕生と
あゆみ

同窓会のあゆみを綴る前に、川越高校のあゆみについて纏めておきたい。

我が母校は、一中(現浦高)二中(現熊高)に遅れること4年後の1899年(明32年)、埼玉県立第三中学校として開校した。1年生は80名。入学試験で特に優秀だった39名を2年生とし、4月28日入学式が行われた。5月28日、4月に完成した新校舎2回で開校式が行われた。



学友会「会報」第一号。表紙の題字は当時の埼玉県知事山田春三氏の筆による

翌年には基本的な学校行事もほぼ揃い、活動の基礎となる学友会が発足した。

1901年(明34年) 8月13

同窓会の誕生

卒業生が220名となった1907年(明40年)の夏、岡田萬雄、岩沢新平ら第1回卒業生の間から同窓会設立の発議があり、川越在住の1回から5回生の各回2名の理事を選出し、当時の前原仙次郎校長と相談しながら設立の準備を進めた。

9月1日、同窓会設立のための第1回例会が川越中学校で開催された。同窓会の誕生である。規約には、「会員相互ノ和合ヲ計ルヲ目的トシ毎年一回例会ヲ開ク」とある。会長は川越中学校の校長がたることになり、初代会長に前原仙次郎校長が就

日。県知事の告示によって校名が川越中学校と変わる。

同年9月、学友会「会報」第1号が発行される。費用は106円59銭5厘であった。

1902年(明35年)には、運動時報社なる組織ができ、春と秋の運動会にその日の競技結果などをワラ半紙大の新聞にして発行した。

川越高校新聞のはしりである。明治、大正、昭和：あの8月15日を経て、1948年、川越中学校開校五十周年のこの年、新制高校がスタート。川越中学校は、川越高等学校となった。

5月17日、新校章の使用が開始された。

任した。会費は、例会参加時に50銭を徴収、新卒業時の入会金を20銭とした。

発足当時の活動は、年1回の例会のみで、その内容は、芸人と呼んで講談や落語を楽しむ。また同窓生による講話、懇談であり、まさに会員相互ノ和合ヲ計ルものであった。

役職の整備と連携の強化

卒業生が600名を越えた1914年(大3年)、同窓会運営と学校とのつながりを強化するために、学校職員から理事1名を選出、さらに事務室の書記が同窓会の事務を担当することになった。あわせて同窓会の維持金として新卒業生の入会金を

914年(大3年)、同窓会運営と学校とのつながりを強化するために、学校職員から理事1名を選出、さらに事務室の書記が同窓会の事務を担当することになった。あわせて同窓会の維持金として新卒業生の入会金を

青年文庫として同志会

元校内幹事 野口 進
(中45・46)

川越高校創立八十周年記念誌の編集に関係したときのこと、川越中学最初の卒業生である安部立郎に関心を持った。学校の沿革史によれば第一回卒業式は明治36年3月であり、同窓会の創立は、明治40年9月とあるからこの間約5年の空白がある。現在ならば卒業と同時に同窓会が発足すると思われるがこの当時はそうではなかったと思われる。



安部立郎
(中1)

創立70周年記念誌によれば第1回卒業生の安部(あんべ)立郎氏等が中心となって校内の学友会(現在の生徒会)の外郭団体というべき「同志会」が明治36年9月に結成されたことある。

同志会は川越中学校の卒業生を中核として他の一般学生や青年も会員とし、地域の文化活動等を目的としたもので必ずしも同窓会とは一致しないかもしれないが、同窓会が設立されていなかった時期に卒業生が中心となり、その結束を強めるという効果が当然あり、同窓会的な活動をしたものと思われる。

七十周年記念誌には「同志会の活動で最も注目すべきは「青年文庫」の設立と「同志会図書館」の運営である」としている。明治35年5月に川越町南町(現川越市幸町)の養寿院に安部を中心とした同志29名(川越中生徒が中心)で青年文庫が設立された。これは回覧文庫で、これが同志会図書館となり、いろいろな経過を経て現在の「川越市立中央図書館」につながっている。現在も中央図書館を利用しているが、その度毎に安部氏のことが想い出されるのである。

明治時代の川越は現在では想像もできないような封建色の残った世間の風潮であったかと思われるが、同志会の活動は困難な中で10代の中学生の行ったこと。またその活動が川越地区にあたえた影響は大きいと考えられる。

現在、川越高校同窓会には殆どの地区に支部(初雁会)が設立されています。全体の会との連携のもと、また各支部毎にいろいろな活動が行われていますが、卒業生の結束の強化という面だけでなく「同志会」の活動のようにその地域の文化活動のみならず多方面で活動され発展されることが期待されます。同志会の明治の頃と違っていろいろな複雑な関係のある現代の社会でも地域のリーダー的な存在となつて欲しいものです。

円以上を同窓会で募り、最終的には5000円余が集まった。同年6月8日、上野精養軒に在京同窓生が集い、懇親会を開く。在京初雁会の基礎である。

在校生、卒業生への支援活動

川中奨学会。1934年(昭和9年)に起きた校長排斥を目的とした1週間ストライキを不祥事ととらえた同窓会有志が母校の名誉回復のために在学生支援制度として、1935年(昭和10

年)5月に創設された。この制度は、1942年(昭和17年)に学校の後援組織として父兄会が創設されるまで続く。

また、優れた活動を見せた卒業生も支援している。1926年(大15年)、明治神宮競技大会(現国体)で北村博学(中23)が優勝すると名誉を称え、募金活動を行い、銀製カップと剣道具一式を贈った。

1936年(昭和11年)、ベルリンオリンピックに陸上競技で鈴木

木間多(中29)が出場すると後援活動を行った。



鈴木木間多 昭和10年 五ヶ国対抗陸上競技大会
1位優勝(ベルリン)

戦後の

同窓会活動

学校が旧制中学から新制高校に移行する中、同窓会も大きく変わっていく。

1946年1月16日に開催された幹事会で、会長を会員の中から選ぶという会則の改正が検討され、12月1日、戦後初めての総会(第35回)で山崎嘉七(中7)が初代会長に選出された。入会金は、1946年に30円。1949年には1000円、1951年には2000円となった。

同窓会が新に発定

1948年4月、新制高校に移行し、定時制課程が発足したのに伴い1949年6月5日に開催された総会で、会則を改正。中学校、高等学校全日制、定時制合同の同窓会が発足した。

《戦後の同窓会歴代会長》

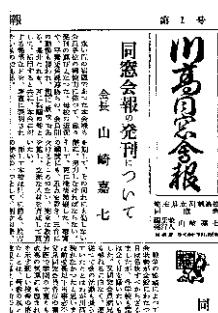
第13代会長	山崎 嘉七(中7)
第14代会長	伊藤長三郎(中21)
第15代会長	北村 博学(中23)
第16代会長	岡村 了一(中43)
第17代会長	佐々木忠一(中32)
第18代会長	渋谷 健(中47)
会長代行	松本 博一(中37)
第19代会長	田中 正(高6)
2006	

同窓会報の発行

懸案事項であった同窓会報の発行が決まり、1953年10月20日付で第1号が発行された。

同窓会の主な事業

1951年の総会で会則が改



同窓会報 第1号

定され、総会を5月の第2日曜日(母の日)におこなうこととされ、毎年実施されてきた。

1961年、理科棟増築の地元負担金について同窓会も協力することになり、204万余円を集めた。

1969年、創立七十周年記念事業として、体育館建設が計画され、学校側より同窓会に協力要請があり、同窓会基金を募集、その1部を建設基金とすることにしたが、募集期間が短かったため500万円余りにとどまった。1970年の総会は、七十周年事業完成祝賀会を兼ね

戦争中の同窓会活動

戦争中は、戦没同窓生の慰霊が重要な活動となった。1939年(昭和14年)には学校に忠霊室が設置された。1942年(昭和17年)11月22日には同窓会戦没会員合祀祭が行われ、翌23日には第23回総会とともに慰霊祭が行われた。1943年(昭和18年)11月の幹事会で当分の間、総会は行わないとしたが、合祀祭、慰霊祭は行った。

多くの同窓生が戦場や学徒動員にかり出される中、運営資金が厳しくなり、1944年(昭和19年)の役員会において、新卒業生は同窓会入会時に5円、終身会費10円を納入することとした。当時の授業料が5円であったことを考慮するとかなりの高額であった。

尚、初代から12代まで歴代同窓会長は全て、川越中学校校長が兼任した。

て行われ、総会・記念式典を新体育館で、祝宴・懇親会を氷川会館で行った。

主な記念事業は、次のとおりである。

1979年、創立八十周年には、記念事業実行委員会に同窓会も参画し中心事業である図書館棟の増改築などに協力した。

- 記念式典および祝賀会の開催
- 国際交流基金の設立(オーストラリア・オーガスティン高と姉妹校提携)
- 百周年記念誌「くすの木」の刊行
- 川越高校新聞縮刷版の刊行
- 図書館の建設
- 記念碑「未来の手」の建立
- 新体育館の建設、弓道場の改修
- 正門の改築、通用門の改修
- 記念音楽会、記念美術・書道展、記念講演会、記念俳句大会、運動部交流試合の開催
- 同窓会独自の事業として「会員名簿」(第18号)の刊行
- 記念親善ゴルフ大会の開催
- 同窓会「母校百周年」祝賀会、記念式典

母校は2009年、創立100周年を迎え、『会員名簿』(第19号)を刊行、翌年から同窓会報を全会員に送ることになった。

また、記念事業として改装中の本丸御殿完成時に「記念碑(P4参照)」の建立が決定された。

従来、本校同窓会は校内幹事(川高OBの現役教職員)が中心となつて運営されてきたが、2010年、専任の事務局長が同窓会室に常駐して、運営に当たることになった。

ホームページは日々更新され最新の情報を提供している。

ホームページアドレス

http://alumni.gnk.cc/kawagoe/

メールアドレス

alumni@hb.tl.jp

同窓会総会記念講演の定着

1953年度から総会で記念講演が行われるようになった。

1976年度以降は、同窓生により記念講演が行われ、現在まで続いている。各回の講師と演題は次の通りである。ただし、92、93年度は都合により講演会

は行われなかった。

76年度 小島 良夫(中45)

77年度 山本 秀順(中27)

高尾山薬王院山主大僧正

「自然と人生」

78年度 松本 博一(中37)

毎日新聞論説顧問

「今日の世界と日本人の

国際感覚

79年度 西川 慎八(中36)

日本大学医学部教授

「公衆衛生学の

先駆者国崎定洞先生」

80年度 佐々木忠一(中32)

日本大学教授人文博士

「環太平洋と日本」

81年度 佐久間勇次(中38)

日本大学教授

「試験管ベビーよもやま話」

82年度 内田 静馬(中22)

版画家

「絵馬と民俗信仰」

83年度 中山伝二郎(定9)

フジテレビジョン編成部長

「テレビ新紀元」

84年度 井上 勝(中45・46)

安田信託銀行常務取締役

「信託について」

85年度 宮崎 雅好(中42)

坂戸市長

「21世紀に向かって

地方自治の課題」

86年度 馬場 樟造(高5)

建築評論家・慎建築編集長

「現代の社会と建築」

87年度 小川 瑞穂(高2)

埼玉大学教授

「生物学の進歩と

私の研究領域から」

88年度 島野 昌甫(高7)

日商岩井(株)人事部長

「貿易摩擦と日本」

89年度 岡村 了一(中43)

弁護士

「賄賂考」

疑獄に明けた平成

90年度 田中 隆(中45)

駿河台日本大学病院教授

「消化器癌の診断と

治療、特に最近の進歩」

91年度 佐々木忠一(中32)

日本大学教授

「現地に見る中東情勢

アラブ対イスラエル」

94年度 田中 正(高6)

あさひ銀行専務取締役

「当面の経済情勢について」

95年度 関口 一郎(高5)

前副知事・埼玉高速鉄道社長

「埼玉の現状と将来」

96年度 佐々木典夫(高12)

厚生省社会援護局長

「社会保護の現状と課題

—少子高齢社会の福祉政策—

97年度 神部 勉(高10)

東京大学大学院教授

「科学の最前線—宇宙に始まり

があった(ビッグバン)

—気象予報はせいぜい10日

間まで(カオス・複雑系の

世界)

98年度 藤原 正義(高7)

伊藤忠商事(株)専務

「日本経済のバブル崩壊とア

ジアの経済危機について」

99年度 椎橋 勝信(高15)

毎日新聞社論説委員

「転換期の政治と地方」

00年度 笹森 清(高11)

連合事務局長

「連合運動21世紀戦略」

01年度 鈴木 邦治(高6)

元エクアドル大使

「ラテンアメリカと日本と私」

02年度 長島 恒雄(高3)

経済評論家

「日本経済は再生できるのか

：成功は失敗のもと、失敗

は成功のもと」

03年度 鈴木 宮夫(高3)

埼玉県副知事

「埼玉県政がめざすもの」

04年度 大野 惣平(高15)

元首都高速部長

「橋について」

05年度 田中 建(高15)

東京女子医科大学講師

「心臓病で死なないために」

06年度 高島 敏明(高10)

「歴史を訪ねて—

比企地方と川越の緑

07年度 可児 一男(高7)

「川越一番街まちづくり」

08年度 橋本 信夫(高18)

国立循環器病センター総長

「川越から京都へ」

09年度 長澤 英俊(高11)

現代アート作家

「現代アートにおける

アイデアの世界」

10年度 安藤優一郎(高35)

小説家

「龍馬を継いだ男

—岩崎弥太郎—

11年度 川合 善明(高21)

川越市長

「地方自治の現場から」

—地方自治の現状と課題—

12年度 吉野 繁(高31)

日建設計・設計部門デザイ

ンパートナー

「634(ムサシ)を目指して

講師の肩書きは、講演当時の

ものです。(敬称略)

入会金・終身会費の推移

川越中学校

1907年 入会金20銭 会費：例会時50銭
1914年 新卒業生入会金30銭 会費：例会時50銭
1924年 新卒業生入会金1円
1944年 新卒業生入会金5円
終身会費10円

川越高等学校

1946年 新卒業生入会金30円
1949年 新卒業生入会金100円
1951年 新卒業生入会金200円
1962年 新卒業生入会金500円
1965年 新卒業生入会金1000円
1996年 新卒業生入会金2000円
卒業後25年経過時に終身会費5000円
1999年 新卒業生入会金5000円
2010年 平成23年度卒業生以降20,000円(入会金・終身会費)
2011年 平成23年度卒業以前の者の、卒業後25年の規定を廃止

同窓会回想

川越高校同窓会は、校内幹事（OBで川高現職の教職員）によって事務局機能を含め、運営されてきました。2010年度から事務局が正式に設置され、OB専任となりましたが、校内幹事の活躍・ご苦労なくして同窓会はあり得ませんでした。校内幹事を経験された皆さんに思い出を語っていただきました。

創立百年記念事業

第18代同窓会長

渋谷 健(中47)

母校川越高等学校長を退職して間もない平成四年春、故岡村了一前会長から、近くに迫った母校百周年のため、会長となつて一肌脱いで欲しいとの要請があった。勿論、自分が浅学非才であるので…と言って固辞したが受け入れられず、会長をお引き受けすることとなった。

翌年春、今度は当時の校長故鈴木良栄先生から、創立百周年記念事業準備委員長（平成7年7月から実行委員長）を…との依頼。これから忙しい日々が続いた。平成11年を目標に「100年を振り返り百年を見通す」を基本テーマに意義ある記念事業に着手した。学校・PT会・後援会・定時制教育振興会等と一体となったが、実質的には同

窓会が中心で。特に副会長を初め役員各位に大変なご無理をお願いしたことに感謝したい。これに応じて、各地に初雁会が結成されたのも忘れられない。

主たる記念事業だけでも、記念図書館建設、国際交流（対豪州）の推進と基金の設立、記念誌『くすの木』の刊行、記念式典・祝賀会、記念碑建立、記念講演会、『会員名簿』の刊行、記念品作成等々多岐にわたり、その基金の大半を県からの補助と同窓会員からの寄付に頼った。幸い県副知事・前出納長らのOBのご協力による当時の土屋義彦知事のご理解、会員各位の母校愛の結集である1億円に及ぶ寄付等で、順次事業は進行し、平成11年10月23日、同時期に竣工していた重層体育館で盛大な式典を挙げる事が出来、ホッとされたのも思い出深い。

明治32年に川越城址に設立され、既に2万9千名に上る有為な人材が巣立った本校に相応しい事業であつたと思うと、その時期に立ち会えた嬉しさと安堵の気持ちは今も鮮明に残っていると同時に、11月13日に開催した同窓会祝賀会には多数の会員方に参集願ひ、一緒に校歌や応援歌を歌い、百周年を喜んだこと。私の同期（川中47高1）は勿論のこと、川高10回生（私の教員在職中の生徒たち）が非常に多額の寄付を集めてくれたこ

と等も感激一入であつた。改めて感謝と出合の幸せを痛感している。今、改めて改装なった学園を眺めた時、当時の苦しさよりも楽しさ・嬉しさがこみ上げてくる。末文ながら、実行委員会事務局長として陰で支えてくれた伊藤豊氏（高2）のご苦勞に深甚なる謝意を表する。

百周年記念・

同窓会名簿のこと

西川 正己(高21)

私が生徒として在学中に七十周年記念事業の会員名簿が発刊されている。佐々木太郎先生の授業であつたろうか。「本校も七十周年を迎え今や孫の代が入学するようになった。記念事業の同窓会会員名簿作りには在校生の手を借りることになった。」と話されたのを今も鮮明に覚えている。私も近所に住む同窓生住所確認などのお手伝いをしたことを思い出す。これが昭和43年に刊行の『会員名簿(第15号)』である。

縁あって母校に奉職となり、百周年記念事業で『会員名簿(第18号)』の発刊に携われたことは光栄なことであり望外の喜びであつた。同窓会事務局長の伊藤豊先生には大所高所から指導をしていただき無事に刊行に漕ぎつけたこと今以て感謝に堪えない気持である。第18号では第15号にはなかった在校生名簿

が掲載されたことは感慨深いものがあつた。同窓会長であつた渋谷健先生による表紙題字の原稿をご自宅に頂きに伺ったことが昨日のことのように思い出される。その題字は母校創立百周年記念事業の第19号会員名簿に引き継がれている。

をして頂いたり、当日の参加者について配慮すべきことはないかなど、スムーズに運営するために繰り返し打ち合わせをして頂きました。前年の散策会終了後にすぐに打ち合わせを始め、会が大成功に終わったときには、ご担当初雁会の方々との事前打ち合わせは数10回に及んでいました。

校内幹事の思い出

沼野 昌義(高34)

校内幹事として私が関わったことは、会計、くすのき講座、そして、2年間の校内幹事長でした。

くすのき講座では、OBの先輩方が在校生に対し、外交官や建築や医学など専門の分野について、ご自身の貴重な体験談を交えてお話し下さいました。ご講演の何日も前にわざわざ同窓会室まで来てくださってリハールをして頂いたり、その真摯な姿勢と後輩に対する温かい心遣いに感動致しました。

幹事長としての一番の思い出は秋季散策会です。卒業生が顔を合わせて自然や歴史を満喫し思い出を語る、そんな年に1回きりの機会を絶対に素敵なものにするために、何度も現地視察

をして頂いたり、当日の参加者について配慮すべきことはないかなど、スムーズに運営するために繰り返し打ち合わせをして頂きました。前年の散策会終了後にすぐに打ち合わせを始め、会が大成功に終わったときには、ご担当初雁会の方々との事前打ち合わせは数10回に及んでいました。

地区初雁会などの誕生

初雁会は、平成23年9月3日川越初雁会が発足し、現在20を数え、各地区で活動している。最も歴史のあるものは、1953年3月に発足した在京初雁会である。年に1度、母校同窓会と共催で散策会を開催していたが、秋の散策会と名称を変え現在まで続き、各地区初雁会が交代で主催している。

在京、飯能、日高、毛呂山、越生、入間、所沢、狭山、坂戸、鶴ヶ島、東松山、小川、嵐山、志木、和光、新座、朝霞、川島、桶川、近畿、川越、初雁医会がありそれぞれ活発な活動を行っている。

定時制分校ものがたり

入間川分校の歩み

前号の同窓会報67号に「定時制課程終了の特集」を組みました。今回から順次各分校を取り上げます。

1964年8月に新築した入間川分校の校舎は、入間川分校修了(1970年3月)後、看護学校の校舎として活用されてきたが、耐震性の問題から取り壊しが決まり、2012年3月をもって活用しなくなりました。



旧入間川分校(右側の建物)

ヶ村(現狭山市)とが認可を受け、同年9月15日に、入間川公民館2号室で開校した。

翌年4月、2年生38名と新1年生63名を迎えるにあたって、町立入間川中学校校舎の一部を借用し、新学期の授業が始められた。

借用していた中学校校舎の新築に伴い、1951年2月、入間川公民館と八幡神社との台地に独立校舎が完成した。



昭和26年完成の独立校舎

以下の内容は元教諭・木村市郎氏記「入間川分校理想抄撮」より抜粋したものです。

校舎の整備

入間川分校は、1948(昭和23)年4月、入間川町と近隣五

昼間別科課程

1952年4月、女子の将来の家庭生活に直結する和洋裁と

調理を主教科とする2年間の昼間別科が併設された。良妻賢母の育成と農村文化と家庭生活の質的向上を意図し、近隣農村地帯の女子の教育に門戸を開いたものだった。しかし、高校進学率が高くなった1966年3月に廃止された。

更に、時代の趨勢には勝てず、分校自体も1970年3月終了となった。普通科747名、家庭科324名が巣立った。

情熱の教師達

定時制教育に無尽の努力と情熱を傾けた教師が数え切れないほどおられ、生徒達には強烈な刺激となった。



初期の頃、諸先生方

豪放磊落で人情に脆い英文学者の日新義虎校長、釣り好きの渡辺正紀校長、眼光鋭く精力的な考古学者の大護八郎先生、優しい人柄で暖れ声に似ず繊細な心根の後藤正男先生、真剣で真つ直ぐで眩しいばかりの温厚な

秋葉光先生、明朗で実力で生徒の人気を集めた矢島義三先生、慶応大学院出で井原西鶴の研究選んだ酒好きで大の正義感だった東海亮造先生、短歌を好み決して腹を立てず円満な性格の見本のような三浦俊雄先生、定時制卒業で早稲田政経出のやさしく礼儀正しく生徒の面倒見の抜群によかった渡辺進先生、同じく定時制出で純情潔癖な正直者で事務能力にすぐれた吉野峰吉先生、好古で愛国者の人情豊かな男性的魅力一杯の芸術家の白井正先生、1回たりとも遅刻も早退もしなかった度の強い眼鏡

をかけた望月良平先生、東工大に勤務しながら教壇にたたれた学究の徒の上田正夫先生、柔道の高段者でありながら歌人であり蘭の花の専門家の山口国高先生、曹洞宗徳林寺の方丈で真つ直ぐで曲がったことの嫌いな傘松正宣先生、そして安い時間給なのに真実一生懸命教壇で汗した講師の諸先生、皆、優異な定時制分校教育の磐石の支柱でした。

青春と学業

空腹を抱え、錆びた自転車ですり利と雑草の凸凹道を10キロほど汗ばみながら通い、暗い裸電球の照明の下で寝ぼけ眼で机に向かい、ろくな参考書や辞典も買えず、己の姿にかまける余裕

もなく追い回され、恋心をあからさまにすることも儘ならず、一個のコッペパンを3分の1に割って1日3食の糧として糸瓜のような顔となったもの、遠く青森、岩手から集団就職し通学していた両手が牌だらけの生徒達、しかし、青春の血を滾らせていた。

分校の各教科の授業内容は相当高く豊富なもので、とくに、英語はジョンソン空軍基地の通訳官をしながら通学していた生徒も数名おり、また、ジョンソン基地将校夫人クラブから無返済の奨学金を優秀な生徒に与えられて勉学の励みとなった。



ジョンソン基地将校夫人の英語の授業

卒業後、大学に進学するものも多く輩出し、東大合格、早稲田、青山大、中大、日大、防衛大など現役入学をはたし、某大学では優等生になった者いた。

卒業生の回想

楽しかった課外授業

第1回 森 轟

私は、昭和27年3月入間川分校(定時制)第1期の卒業生です。私達のクラスは20数人で、最も年長者は昭和3年生生まれ、年齢も職業も全くバラバラ、昼は農業をやり汗を拭き拭き登校する者、米軍の施設で解らない英語と真剣に取り組んで精神的にフラフラになって飛び込んで来る者、女子も7、8人在級していたが何しろ63年も前に入学した頃の事で、すっかり思い出すのも困難の状態です。

さて、私達のクラスは、分校長で郷土史の第一人者であった大護八郎先生ですから授業の一部として狭山周辺の地藏尊や石塔を尋ね歩き。拓本を採ったり、石塔などの由来を調査したり、楽しい課外授業が多かった。



(大護八郎先生・日本史)

そしてまたその頃は、スキーが盛んであった為、上野駅から夜行列車に乗り、上越湯沢の次の石打へ何度か滑りに行った。汽車の中では床に新聞紙を敷いて座席の下へ頭を突っ込んで寝たものです。

狭山初雁会が結成され、総会に出席したが、私の外1名のみで大変さびしかったが、総会で歌った校歌は往時を想い出し、大声で歌い青春を取り戻した思い出であった。川越高校の更なる隆盛をお祈りし、筆を置かして頂きたい。

木造校舎に通った頃

第5回 島田 博

昭和25年6月に川越高校入間川分校を訪れて、面接とテストを受け、1年生として編入を認められ当時20才の高校生の誕生でした。

私は満州(現在の中国)で旧制中学3年生で終戦となり、翌年帰国した北引揚者です。弟や妹達は義務教育とあってそれぞれ通学を始めましたが、当時は商店経営の手助もあり、弟妹6人の長男の立場で無理な話でした。

数年後、近くのOさんが夜学に通っているとの情報があり、それならば昼間仕事が出来たのではと彼の紹介で初めて定時制の存在を知ったわけです。

私が通い始めた頃は未だ入間川小学校に居候時代で専用に教室は無く、夜のがらんとした校舎の一隅で子供達の小さな机と椅子を借りて、ぶらさがった電球の下での授業でした。

暫くして八幡神社の隣に在った古い建物に移転、学年毎の教室、職員室、特別室や宿直兼用の休憩室まであり、卒業迄過ごしました。

現在の入間基地は、当時はジョンソン基地として米軍に使用され、近くに在る為、基地関係勤務の人が多く、分校全体では1割以上居られたかと思っています。当時の入間川町や水富村の役場の職員、そして会社や商店勤務、農家の方、皆な昼間の仕事を終えての通学でした。定時制の創生期とあって年齢的に中学卒業したての方から、30歳過ぎの方迄、随分幅がありました、違和感もなくクラブ活動やスポーツ、年に一度の本校での運動会等々。4年の時には殆ど全員で関西に修学旅行にも行きました。

日高から狭山迄約10キロ、交通手段は自転車のみ、往路はバラバラですが、復路は一緒、殆ど車のない夜道を5人が横一杯に広がって、わいわいがやがや帰って来ました。

車で行けばすぐの距離ですが、周囲の景色もすっかり変わり、道路は車の波、5人の仲間も3

人が逝き、1人が千葉に移り、残り1人となってしまいました。今となると半世紀前の遠い昔話です。

自衛隊に勤務しながら

第18回 八島 藤夫

昭和38年春、川越高等学校入間川分校へ入学した。当時、私は航空自衛隊入間救難隊に所属していて、クラスには隊員も8名程在籍していた。仕事と勉学を同時進行できた事は、自分にとって良い人生経験ができた。

4年生の時、クラブ活動は音楽部の部長をして、学芸会では混成合唱等を行った。生徒会の副会長も務めた。

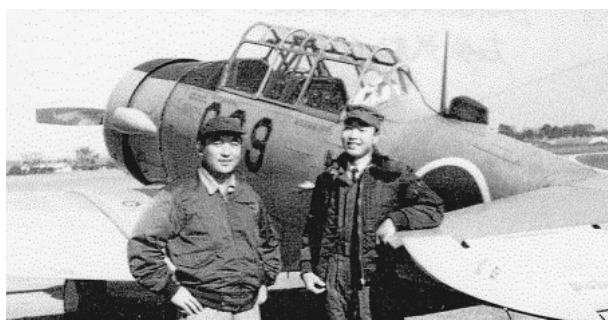
勉強以外で楽しかった事は、野外活動、バス旅行や運動会、中でも修学旅行は、新幹線で京都、奈良、宇高連絡船で四国の金比羅神社や栗林公園の見学等は良い思い出の一つとなっている。

校舎脇の古い公会堂(現中央公民館)の所は、狭山市駅西口再開発の為、平成24年7月に駅前ビルに移転し、その前にあった大銀杏の樹(推定600年)は東中学校脇の幼稚園で引き取ってくれる事が決まり、狭山市駅周辺は現在と大きく変わってきている。

仕事については、当時の航空救難隊は、防衛長官の直轄部隊

で、その任務は民間との関係も多く、災害派遣を含めて物資の空輸、海難救助、山岳救助、緊急人命救助等、多岐にわたっていた。

使用機種は大型、中型救難用ヘリコプター、単発・双発の捜索用飛行機で全国に八ヶ所の部隊でその任務を遂行していた。



(右側が八島氏)

私の仕事は隊長付専属運転士と各部隊の移動に関する管理的業務を行っていた。出張時は部隊の航空機を使用する為、搭乗する機会が多かった。

航空自衛隊除隊後、本田技研狭山工場に3年間勤め、定年退職後はNPO狭山市日中友好協会理事長をはじめ、地域団体の役員を複数担当し68歳に至っている。

東日本大震災に対し同窓会等が支援を行う。

同窓会の支援

平成23年3月11日に発生した東日本大震災について、同年5月29日に行われた同窓会総会において、この未曾有の被災に対して、支援金を贈るべきとの緊急提案が出され、同窓会から百万円を支出することが満場一致で可決されました。

同日に募集した義援金と合わせた111万6千850円を川越市に寄付いたしました。

このことに對して、川越市より感謝状を受けました。



陸上競技部OB会の支援

宮城県立石巻高校へ、60余万円を寄付しました。

同校の陸上部の皆さんは8月、北上市で行われたインターハイ

陸上100メートルに出場の鈴木俊洋君の応援に駆けつけてくれました。

吹奏楽部OB会の支援

宮城県私立東北高校へドラム・オーボエ・クラリネットなど62点の楽器を贈呈しました。

現役生が

「くすのき祭」で募金活動

9月3日4日に行われた川越高校名物行事「くすのき祭」において、東日本災害支援のため、入場門（今年は熊本城）のなごに募金箱を設置し、義捐金を募りました。



義捐金は20余万円集まり、日本赤十字社に寄付いたしました。

現役吹奏楽部の支援

川越高校「ソリッド・ブルー・ジャズ・オーケストラ」が、東日本大震災チャリティー「大学ビッグバンド Jazz Festival in

川越」(9月24日・川越市民会館ホール)に招待されて演奏し、支援の一翼を担いました。

「体験談」の投稿

東日本大震災を体験して

久保多太男(中4)

3月11日午後2時46分に三陸沖を震源とするM9.0の東日本大震災が発生。さらに、同日午後3時15分ごろに今度は茨城県沖を震源とする強い揺れも発生しました。

遅い昼食中でしたが、見ていたテレビは大揺れの最中消えました。津波は揺れから約1時間後に沿岸一帯にやってきました。

幸い、我が家は仙台市の北部、スキー場がある泉ヶ岳(標高約1300M)の裾野の一部に広がる富谷という町にあり、高台の丘の最上部を削った場所に建っていますので、当初はいたした地震ではないと思いました。

水もガスも当日は止まりませんでした。止まったのは翌日の午後でしたが、これは給水・給ガスの途中に残っていたものが出たと思われます。水もガスも翌日昼ごろまでに止まりました。電気の復旧は3月14日ごろ、水は3月28日午後、ガスは4月3日ごろでした。

仙台市内では、地震発生後1ヶ月になっても6割が電気も、

水もガスも止まったままでした。

我が家では保存していたペットボトルの飲料水で当座をしのぎ、トイレ用は近くの小学校のプールの水を手で運びました。予備の水は近くに住む長男が60リットル搬入してくれました。食事は携帯ガスコンロで保存していた食材を使用、困った思いはしませんでした。おやつのは長男の嫁が運んでくれました。

被害を大きくしたのは、4月7日深夜の同じ震源地に発したM7.4の余震でした。復旧作業に待ったを掛けました。東北新幹線の東京・青森間が再開したのは50日目の4月29日でした。一部区間が運休していた仙台市地下鉄も同日再開しました。

小さな余震はほとんど毎日、毎晩ひっきりなしにあったように感じております。よく眠れず、それが疲労回復を妨げたようです。籍をおいていた河北新報社の場合、社員には死者・不明者はでませんでした。新聞販売店は、宮城県で13店、岩手県で5店が流失、店主が両県でそれぞれ1人亡くなりました。配達員は宮城県では23人が亡くなり、4人が不明になりました。河北新報社は逆境にめげず、きめ細かい報道を貫いたことが認められ、今年度の新聞協会賞をいただきました。

東北各地の津波の高さは①宮古・田老 30・7M②大船渡綾

里・白浜 26・7M③近くに原発のある女川港 18・4M④釜石 18・3M⑤陸前高田 18・0M⑥福島第一原発 15・0Mでした。女川原発は最大9・1Mの津波を想定して設計されていますが、福島原発より10年ほど新しいので何とかしのげたようです。

河北新報社は3月21日付第二面で、やっと女川原発を大きく取り上げました。それまではたまたに数行報じただけでした。一面の紙面案内では「女川原発は大丈夫か」と注意を喚起しましたが、電力会社の隠蔽体質に翻弄されたようです。この点、海外でもいらしたようで、河北新報3月18日付 ワシントン、東京・共同によりますと、福島第一原発事故について「情報が少なすぎる」として国際社会で非難が急拡大している様子を伝えていました。米CNNテレビの看板キャスター アンダーソン・クーパー氏は「日本政府は(国際社会の)信頼を失いつつある」と17日指摘、「首都圏の放射線量などの発表情報量が少なすぎる」として、東京都民は米政府の情報に頼り始めていると伝えていました。

EUのエッテンガー委員(エネルギー担当)は信じられないほど場当たり的、日本の評価を見直さなければならぬ、と同様に日本政府を批判していました。

各OB会・同期会の活動

祝・傘寿「川越高校2期の会」

岡田 良平

昭和19年県立川越中学校に入學した私達は昨年めでたく「傘寿」を迎えた。振り返れば激動の歲月であつた。中学入學と同時に五泊六日の富士の宿泊訓練に参加し、教練教官4人に厳しく鍛えられ富士の裾野を駆けずり回つた。当時の資料によれば、「目的・純真ニシテ向學心ニ燃ユル入學当初ノ第一年生ヲ靈峰富士山麓廠舎ニ収容シ厳正ナル校紀ノ下ニ各個訓練、礼式訓練等ヲ実施シ・」とある。そして翌20年2月には、上福岡の東京第一陸軍造兵廠第一工場に学徒動員されて日々危険な砲彈造りに励み、勉強するいとまもなかった。正に軍国少年の時代であつた。

そして戦後、学制改革6・3・3制となり中学・高校と6年間を川越の地で学ぶことになった。24年には生徒会が発足し、同期の橋本日出松氏が初代会長に就任、また芹沢良三氏が全国高校軟式庭球大会で優勝している。

昭和25年に同期262名が卒業したが30数名は中学48回で卒業している。同年はまた朝鮮戦争が勃発した年でもあり世の中



は騒然としていたが、卒業後家業に、社会人に、大学に進学するものとそれぞれに厳しい門出であつたが、12名の同期が東大に進学されたことは特筆すべきことである。

尚、平成11年には上福岡の火工廠跡を翌年には富士の訓練場跡の視察会を開催したが既に昔日の面影は無く少年の思い出を呼び起すことは出来なかつた。毎年「高2の会」を開催しているが、昨年は傘寿を迎えたことであり、5月に川越東武ホテルで「祝傘寿」の会を開催した。

趣向をこらした参加者名簿を見ながら話は弾んだ。川高時代、家族のこと、趣味のこと、病氣のこと、迫りつつある老いの悩みなど、必ずしも楽しい話ばかりではないが元氣に参加出来たことを皆で喜びあつた。と申しますのも既に百余名の方が帰らぬ人となっている。

ご冥福を祈るばかりである。

卒業五十周年の同窓会

犬竹 一浩(高13)

私達、高13回生は、卒業50周年と数え年で古稀を迎えた。

平成23年11月26日、川越プリンスホテルにて同窓会を開催した。来賓として、高3時担任だった、岡田潔先生、齊藤彰勇先生、そして同級生も70余名が出席した。(石川先生は欠席)大久原秀雄恩師はじめ、33名の同期物故者へ、ご冥福を祈り全員で黙祷を行い、在りし日の面影を偲んだ。齊藤先生から御挨拶を戴き、岡田先生のご発声で声高らかに乾杯をした。

楽しい懇談に入り、懐かしい恩師や学友との久し振りの再会、想い出多い高校時代の回顧、そしてマジックショー、トークショーなどで盛り上がった。又、30年間も続いている、同期ゴルフの会「くすの木会」(年2回60人以上の会員数)の紹介と勧誘など、楽しい時間は、瞬く間に過ぎた。勿論、最後は元応援団の指揮の下、校歌・応援歌を高唱し、全員でスクラムを組んでお開きとなった。開会前に撮った記念撮影は、閉会時に全員に配布した。

二次会は、元鏡山酒造の跡地に昨年オープンした小江戸蔵里の「八州亭」で40名弱が約一時間半、別れを惜しみ懇談した。次回からは年齢を考えて五年

に一度位の間隔で同窓会を開こうと言う意見が多く出された。



川越初雁会設立と24年度事業
事務局長 岩堀 弘明(高8)
平成22年春から、川越初雁会設立の機運を醸成することに努め、次第に川越在住者の名簿が整ってきた。11回の会議を経て、平成22年12月5日、同窓会会館にて、設立準備会(40名参加)を開催した。その後2回の設立発起人会、3回の発起人幹事会まで延べ196名が参加して設立準備を行った。

その結果、平成23年9月3日(土)川越氷川会館にて132名の参加を得て設立総会を開催、9月30日に310名の会員名簿を作成、会員に配布した。

10月22日川越で開催された「秋季散策会」の主管を川越初雁会が努めた。

『24年度の今後の活動』
一 広報誌の発行(年2回)
木下重美委員長(高11)のもと、7月に創刊号を発行する。

二 ゴルフ部会

竹間正雄プロ(高4)を顧問に、ゴルフ部会長の松本寛氏(高12)のもと、4月後半に第1回コンペを準備中である。

三 川越初雁会春季散策会
実施を6、7月で模索中。

四 総会

母校くすのき祭の9月2日を予定。記念講演は、辛坊正記氏(高20・国際金融専門家)を予定している。

初雁医会の開催

廣澤 信作(高21)

川越高校卒業生の医療関係者の会である第二回初雁医会が、56名の先生方が参加され、川越プリンスで平成23年11月12日に開催されました。

第一部は、平成13年5月12日の第一回の初雁医会(経過は同年5月13日発行の同窓会報に掲載)の幹事をされた前・入間地区医師会長の原田雅義先生(中45・46)の開会のご挨拶で始まりました。次に、飯能医師会会長の石井道夫先生(高8)から10年ぶりの再会に至った経過と3月19日の予定が東日本大震災のため中止となったことの話がありました。

講演では、埼玉医科大学国際医療センター教授の松本万夫先生(高22)から「心房細動のトータルマネジメント」の非常に興味深いお話を伺え、福島県立医大准教授の大谷晃司先生(高35)から「東日本大震災以降の福島県の現状について」と第一原発の事故以降の医療現場、必要な低線量の長期被爆の不安などのお話があり、福島の大変な現状を再認識しました。

第二部は、当会の会長で元入間地区医師会長の関根迪式先生(中42)からご挨拶をいただき、来賓の川合善明川越市長、田中正同窓会長のよりご挨拶をいた

だきました。

元日本医師会理事荻野光男先生(中39)の乾杯で懇親会が始まりました。一線の医療現場で活躍する会員相互の情報交換や学生時代の話に花が咲き、会員の近況報告をまとめたものを配布し、先生方の現況や活躍を確認していただいた。



学校紹介のDVDを映し元気な学生を見て、昔を思い出し、最後の校歌の斉唱を行った。齊藤達先生(中42)の閉会の辞で、次回の再会を約束し散会とした。

事務局は、原田雅義氏の病院内秘書室(〒358-0003 入間市豊岡1-13-3・電話04-2962-1251)です。

二〇一一年マスターズ甲子園
第6回埼玉県大会・
結果報告

長田 和哉(高17)

今大会、我がOBチームは、11月6日の二回戦(一回戦はシード)・対城西川越戦をかわきりに(25対2)、23日の対所沢北戦(8対5)も順調に勝ち上がり、26日の準決勝、対与野農工戦も27対9の大差で勝利し、27日大宮球場にて対大宮工業との決勝戦に臨み、10対0の完封で優勝した。



本年11月10日(土)甲子園での戦いに進出することができました。

吹奏楽部創部
50周年記念演奏会

青木 正己(高21)

平成24年、吹奏楽部が創部50周年を迎えます。記念演奏会や記念パーティ、記念誌の発刊などを予定してます。

日時 24年5月5日(土)

会場 川越市民会館

第一部 現役演奏

第二部 OBビッグバンド・コンボ演奏

第三部 現役・OB合同ステージ

ジ

田村文生(高24)さんに記念曲を委嘱しここで指揮・演奏します。

小川初雁会発足30年

会長 小川 幹雄(高17)

小川初雁会発足以来、32回目となる平成23年度総会が6月11日(土)、町内の晴雲酒造・自然処玉井屋(高17・中山正義氏経営)で開催された。

31年前、本会発足にご尽力された幹部の方々の多くは他界され、当時、末席でお手伝いをさせて頂いた私どもが、現在役員をさせて頂いております。

今回は総会の冒頭、1966年から80年までの14年間、本校体育教諭として、その後、日本バレーボール協会・前専務理事で北京オリンピックバレーボールチーム団長の萩原秀雄先生に『2008年北京オリンピックまでの道程』と題してご講演をいただき、出席者一同、大変興味深く拝聴しました。

講演後、議事・懇親会と進み、最後33名の出席者全員で肩組みあい、校歌、応援歌を熱唱し、

若き頃に思いを馳せ、次回の再会を期して閉会となった。

当会の会員は小川町在住者を原則ですが、都幾川町の一部及び他地区在住でも金融関係等小川町に勤務している方を特別会員として構成されております。そして年に一度の総会と新年会を開催しております。



過去は、親睦旅行の他ゴルフコンペ等も頻繁に開催された時期もありましたが、現在新規会員の加入減の状況に苦慮いたしております。又、我々の在学当時、学生服に白線帽で小川町から遠距離通学をし、現在も近隣に居住している同級生も、通常はお互いに交流の範囲は限られております。そのような中、この初雁会が会員相互の意見交換の場、友好の場として広範囲により一層連携を強化し、今後とも末永く維持発展出来ればと願っております。

会員だより

故・浜野達男氏(中44)
図書館に100万円寄付

福岡 恵一(高36)

埼玉県立第三中学校を昭和20年に卒業した浜野達男氏は、「自分が死んだら川高図書館に100万円を寄付して欲しい」という遺言を残して、平成21年に亡くなりました。そしてその遺言どおり平成23年夏に寄付がありました。

これを活用するため「浜野文庫」として、普段では買えない値段の高い辞書など約250冊の本を各教科準備室に置く予定です。

本校図書部主任、高野好美教諭によりますと、「浜野氏は戦時中だったため、本来5年間を学んでから卒業するところを4年間で卒業してしまった。戦争で自分が学べなかった分、もっと学びたかったという気持ちと母校への思いが強かったのだでしょう。だから今の川越高校の生徒に学んで欲しいという思いで100万円を寄付したのでしょう。」と経緯を話されました。

浜野さんは戦争で勉強できなかっただけでなく、戦争自体も経験している。今学べるのが当たり前でないことを知って欲しいものです。

生徒勤労動員令

山根 豊(中44)
加島 完(中45)

山根の小学校同窓有志の会は「辰己会」加島の同人会誌名は「みうま」、いずれも千支の生まれから名づけたものです。

昭和19年戦局はますます激しくなり私達中学生・女学生は皆「欲しがりません勝つまでは」の標語のもと、朝霞の陸軍被服廠、上福岡の火工廠「陸軍造兵廠川越製造所」が正式名ですが、通学ではなく、通勤するようになりました。

朝の東上線は朝霞へ行く川中4・5年生と上福岡で降りる川中3年生、川商・川女・山村女の人達で大混雑、今でもあの押しくらマンジウが思い出されます。

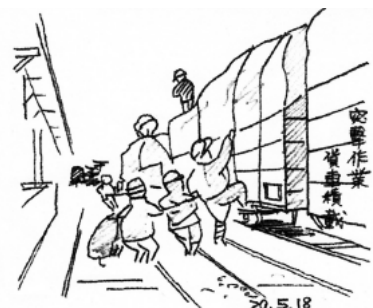
被服廠では栗原三省先輩が、貨車の入れ換え作業で亡くなり、火工廠では、生田巖君が火薬の圧縮作業中の誘爆で全身火傷となり、亡くなりました。

太平洋戦争では多くの先輩が、陸軍・海軍・空軍に参加され、戦死されて居られる。

銃後でもこのような事があったのを記し、謹んで皆様のご冥福をお祈り申し上げます。

平成23年1月、川越工業高校に勤労動員について、お尋ねした所、百年史71・72頁にその記載があり、川越市内の三徳工業

(現新報国)、片山製作所など10ヶ所に分散、お国のために汗を流されたのである。



スケッチ・山根豊

なかでも工業化学科2年生の方々は被服廠で、我々と同じ敷地内に居られたのが判明、当時分かっていたらとまことに残念である。

また、紡織科4年生吉沢八郎氏は鉄場の帝国火工に於いて尊い生命を捧げられたのである。

(陸軍造兵廠川越製造所とは)

上福岡の中央に当たる地域に昭和12年から終戦まで、陸軍の弾薬工場がありました。最終的な規模は、16万5千坪、大小600棟以上の建物があり、川越中学校、福岡国民学校などからの生徒動員、女子挺身隊員なども含め数千人にも及んだと言われています。

機関銃の弾丸や雷管。珍しい兵器として陶製手榴弾も製造されていました。

畏友斉藤博君(高4)を悼む

大浦 一郎・記

11月10日、幼馴染みの同窓生斉藤博君が下咽頭ガンで亡くなった。78歳であった。

1956年のメルボルン大会、60年のローマ大会で正選手として、また64年の東京大会ではコーチとしてオリンピックで活躍し、わが国のバスケットボール界をリードした彼は飯能出身。私の家も近く、昭和21年に共に飯能第一小学校から川越中学校に進んだ旧制最後の初雁健児である。

「うなちゃん」の愛称は、ひよる長い背の高さがうなぎを連想させた事に因むが、立教大学に進んだ後も愛称は引き継がれたらしい。もともと由来は川高時代とは異なり、猛練習に堪えて日々精進を重ね、体格的には彼を上回った多くの仲間を押し止めた時に、「斉藤の技の進歩はうなぎ登りだ」と監督が評した事に始まるという。

いずれにしても、下宿から大学まで毎日かけ足で往復したという彼の努力とバスケに賭ける覚悟は並大抵のものではなかったし、また身体に恵まれていた。健康を害して次々に脱落する仲間の中で頑健さを保ち続けたが、「猛練習に堪え抜ける身体に生んでくれた親に感謝しているよ」と語った言葉は彼の本音だろう。

コートでは練習の鬼で、



高校時代の斉藤氏
中央8番

先輩に対しても容赦なく大声で叱咤する姿勢は川高時代だけのものではなく、大学や日本鉱業、全日本のチーム時代も同じであったという。大学、実業団ともにバスケット黄金時代を築いていた時期の立教大学と日本鉱業のチームに属していたのは幸運であり、その後の日本スポーツ界における良き人間関係を築く要因となったのは間違いあるまい。ビジネスマンとしても一流であった。ニューヨーク滞在も長く、主たる勤務先の日本鉱業KKでは取締役になで登りつめているし、退職後は日本タンカーや日本マリンといった会社の社長を勤めた。

晩年はサレジオ学院中学校その他ので青少年のバスケの指導に打ち込んでいた。同窓会で飯能に來た折りに二次会に誘っても「遠いし、明日朝練が早いから」と帰るのが常であった。

本年、結婚50周年を迎えた恋愛房美智子夫人の仲睦まじさは格別であったようで、告別式でのご長男の言葉によれば「息子や娘も羨やむ程」であったという。

ひたむきに努力し、しかも諸目標を成就させた畏友斉藤博の一生は、幸せな男のそれであったと言わざるを得ない。

母校だより (二)

文化講演会

講師 滝澤民夫氏(高18)

平成23年12月19日月曜日、13時半より川越高校体育館にて「文化講演会」が行われました。この行事は、例年卒業生を講師としてお招きして、在校生に向けて講演していただくものです。今回は、この『同窓会報』でも「川越中学校初代校長 増野悦興の謎」を連載している滝澤民夫氏でした。氏は1999年から定年退職される2008年までの9年間、本校の地理歴史科の教諭として勤務していました。演題は、在職当時から研究されていた「川越中学校初代校長 増野悦興の生涯」でした。

長年にわたる研究調査を2時間足らずの講演にまとめることは、とても大変だったと思います。ここでは研究の内容を紹介することよりも、氏の言葉を引用しつつ、講演の様子を伝えていきたいと思います。

研究のきっかけ

滝澤氏が本校に教諭として赴任した99年は、本校百周年の年であり、『記念誌 くすの木』の編集が行われていたそうです。その仕事に校正という形で関わ

った氏は、『八十周年記念誌』で、3才先輩の児島康夫氏が書かれていた増野悦興の研究を読み、大変驚かれたそうです。講演の冒頭で、研究のきっかけを次のように述べました。

「…なぜ驚いたかという点、埼玉県で3番目にできた川越中学校の初代校長の増野という人物は33歳です。その後、35歳で職になって、46で亡くなります。それがずっとなぜかということ(頭に残っていて)、調べがはじまりました」



研究調査の旅

講演では「増野の生きた時代」「青年の生き方の模索」「川越中学での増野の教育」「青年の生き方とふるさと」などの話題を話されました。

増野の生涯について研究調査を開始した滝澤氏は各地へ赴きます。東京の雑司が谷霊園で増野の墓を見つけ、ご遺族にコンタクトをとったことで、初代校長がボストンへ留学していたことを知ったそうです。

その他、留学先のマサチュー

セッツ州ボストンやメイン州バングア、資料を求めてワシントンの国立公文書館、出身地の山口の津和野、出身校の同志社大増野の妻咲子の出身校がある神戸、咲子の出身地の香川などを訪れて調査をしてきたそうです。講演では調査で収めてきたたくさんの写真を投影しながら、数々のエピソードが紹介されました。増野自身の話題の他に、増野の師である新島襄のことや、ボストンでの調査のことについても詳しく話されました。

増野が辞めた理由

「増野は理想に燃えてやってきて、同志社を卒業直前に、(牧師と喧嘩して、8人の仲間と共に)辞めてしまった。その後、恩師の新島襄の後ろ盾でボストンに留学し、二つの神学校で3年間勉強をした。帰国後、名門の教会で牧師になるが、(新神学論争の渦中で聖書の教えに悩み)辞めてしまった。その後、ここで頑張ろうと思って、ここが故郷だと思っていた川越中学校を職になった」

滝澤氏は、増野が川越中学校の校長を辞めたいきさつを次のように推測し、述べました。

「その増野は、青年を育てることが、この国を良くすることだと一貫して言っています。自ら修めて自ら学ぶような学校を作ろうとした…多分それで、職

になった」、「増野は、県知事が代わった時に県庁に呼びつけられて、休職命令をうけます。多分彼は県の役人と喧嘩してとばされたのだと思います。地方にとばされたのを拒否して、半年後に自ら辞めたのだと思います」



増野の思い

「一つのことを追い求めることは、一人ではできない。たくさんの方の世話になっている。だから、勉強したことを皆に返していかなければならない。それが増野の言うところの『学問をする人間は、人びとに恥ずかしい人間になれ』ということなのです」、「川越高校の理念というのは、幅広く勉強し、礼儀を忘れずに、自分だけの勉強ではなく、自分の勉強したことを少し膨らませて、次の世代に

講師略歴 1947年東京都生まれ。66年(昭和41年)本校卒業後、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。74年(08年)、埼玉県公立高校社会科教員。この間早大非常勤講師を3年間兼任。現在、同大教育学部等講師。著書に『戦時体験の記憶文化』(有志舎)がある。

伝えようじゃないか。そういう思いで勉強しろという精神で作られたものです。そのような人が増えることが、長い目で見て、世のなかを変えていくことだと、増野は言ったのではないかと思います」と、氏は増野の思いをまとめ、生徒に伝えました。

「好きなことをなせよ」

川高教諭時代と同様、熱のこもった語り口調で進んだ講演も終盤にかかりました。生徒には「好きなことをなさい。自分がやったことで周りが喜んでくれるような仕事をしよう。好きなことをするために、好きな勉強をすればいい」と語り、そのうえで、「増野は、高い理想をかかげて、(ある意味挫折をしたけれども)有限な人間は、有限な存在であるけれども、理想は無限であることを、伝えてくれているのだらうと思います」と講演をしめくりました。

校内幹事 福岡恵一(高36)

新たな五年始まる。

川越高校スーパーサイエンス
ハイスクール

SSH企画部 阿部 宏

本校は今年度、文部科学省の科学振興事業「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」二期目の研究指定を受けました。

今年度の成果

●世界大会銀メダル

三年生の浅見慶志朗君（地学部）が、九月にイタリアで行われた地学オリンピックで見事銀賞を受賞しました。

●全国物理コンテスト銀メダル

八月に行われた物理チャレンジで三年生の串崎康介君（硬式テニス部）が昨年に続き、見事銀賞を受賞しました。また三年生山田涼太君（物理部）が全国大会に選拔されました。



串崎君 浅見君

●全国SSH指定校生徒研究発表会ポスター受賞

八月に神戸で行われた研究発表会で参加百四十五校中、上位二十%以内に入りました。

●全国大会出場決定

第五回日本地学オリンピック一次選抜で、二年生田中優介君

（地学部）が二次選抜（全国大会）出場を決めました。

●国際シンポジウムで三位

十二月早稲田大学本庄高等学校主催で行われた、台湾HSP指定校（日本のSSH相当校）十一校と日本のSSH指定校十校合計八十四名によるシンポジウムで競技会部門三位、特別賞受賞という成果がありました。



SSH 生徒研究発表会

●三割超の生徒が、SSHが本校志望の理由の一つと回答。

●一年生研究グループ過去最高

SSH基礎I研究グループの選抜者が過去最高の一七二名となり、SSHに関わる生徒の裾野がさらに広がりました。

●七割強の生徒がSSH事業で

科学への興味が高まったと回答。研究規模大。全学年で約三百名の生徒が研究活動を行う。

●千二百名参加「冬休み科学教室」

十二月二十四日川越市内の小中学生と保護者千四十四名が川越女子高校に来校、川高、川女、川南の合計二百十四名の

生徒が先生役として科学の楽しさを様々な実験で伝えました。

SSH事業の目的

「将来の国際的な科学技術系人材育成」

のための先進的な理数教育カリキュラムの開発が目的です。本校は昨年度一期目の指定を終了、今年度から二期目五年間の指定を受けました。高校としては破格の年一千万円レベルの研究資金の支援を受けます。

「意欲のある生徒の能力を伸ばす。」「出る杭を更に出す」がSSHのモットーです。

本校SSHのテーマは新指定から二つ設定しました。一つめは「**知の融合**」です。趣旨は、人文・社会・自然科学、すべてに渡る広い視野を持つて、分野横断的・融合的な新しい学問を創造しうる人材を育てるということです。二つめは「**知の継承**」科学ネットワークの水平展開と垂直展開」です。趣旨は、

一期目で培ったSSHのノウハウを高校間・小中高大企業・県・国と共有しようというものです。本校SSHの特徴は全生徒に科学リテラシー教育を行うことです。現代社会は科学技術なしで生きて行くのは不可能です。科学の最先端ではどんな研究が行われ、それが科学技術としてどう社会で使われていくべきか。全員が教養として身につけるこ

とが本校SSHの目的です。

主なSSH事業

●大震災を受けた全校講演会

「原発と放射能」というテーマで、立命館大学名誉教授安斎育郎先生にご講演いただきました。内容は「大震災と原発事故を受け、科学技術はどうあるべきか、人は科学技術にどう向き合うべきか」、「風評被害やデマ等にだまされないためにはどうすべきか」についてです。東大工学部原子力工学科時代に原発の問題点を指摘して以来、「原子力村」から受けた様々な体験にもめげず信念を貫き通した先生の生き方は、人はどうあるべきかを生徒に突きつけるものでした。

●SSHハワイ島実習

本校SSHのリーダーを育てる中核事業です。今年は八月下旬に五泊六日、生徒八名で実施しました。目的は最先端科学に触れ科学への志を高める、フィールドワークと後の研究で研究能力を高める、実習をすべて英語で行い国際性を高めることです。テーマは三つ。「宇宙誕生」では世界に誇るすばる望遠鏡山麓施設での研究者とのワークショップ、四千二百mのマウナケア山登頂と天体観測、「地球誕生」「生命誕生」では、ハワイ大学の火山学者、生物学者によるキラウエア火山でのフィールドワークで、大地が生まれる現場に

立ち会い、生まれたての大地に芽生える生命の力を学びました。これまでの実習者から、地学オリンピック世界大会銀メダル2名、物理コンテスト全国大会金メダル一名、銀メダル二名と、世界、全国トップの成果がありました。ハワイ島実習は意欲のある生徒の志に火をつけ、自分の殻を壊し進み続ける力をつけ、彼らの研究能力を飛躍的に伸ばします



ハワイキラウエアアイキ溶岩湖

今年度のまとめ

今年も全学年の生徒達がSSH事業で志を高め、粘り強く取り組み力をつけ結果を出しました。SSH事業で意欲のある生徒達がまとまり、高校の枠を超え、やりたいことを徹底的にできる場ができたということが、成果の理由としてあげられると思います。

SSH事業への同窓会のご支援に深く御礼申し上げます。今後ともよろしく願っています。

2012年度 大学等入試合格状況一覧

母校だより
(三)

国 立

大学略称名	現 役 合格 入学	過年度卒 合格 入学
旭川医科大学		1 1
北海道大	3 3	5 5
弘前大		1 1
岩手大	1 1	
東北大	7 7	
秋田大		1 1
山形大		1 1
筑波大	11 11	3 3
群馬大		1 1
埼玉大	12 10	6 6
千葉大	6 5	2 2
東京海洋大	3 3	1 1
電気通信大	4 3	2 1
東京大	2 2	3 3
東京医科歯科大	1 1	
東京外国語大	3 2	2 2
東京学芸大	4 3	
東京工業大	7 7	5 4
東京農工大	9 8	4 4
一橋大	1 1	
横浜国立大	2 2	4 2
新潟大	2 2	1 1
信州大	2 1	
静岡大	1 1	
京大		1 1
大阪大	2 2	
山口大		1 1
熊本大	1 1	1 1
大分大		1 1
計	84 76	47 43

公 立

大学略称名	現 役 合格 入学	過年度卒 合格 入学
高崎経済大	1	
首都大学東京	2 2	2 2
石川県立大	1	
計	4 2	2 2

大学略称名	現 役 合格 入学	過年度卒 合格 入学
獨協医科大学		1
埼玉医科大学	1 1	1
城西大	3	1 1
獨協大	2	3
文教大	5 1	1 1
日本薬科大	1	
帝京平成大		1 1
青山学院大	12 4	10 2
亜細亜大	1 1	
学習院大	6 1	7 4
北里大	6 1	
慶應義塾大	24 11	14 4
工学院大	3	1
国学院大		2
国際基督教大	1 1	
駒澤大	1	3
芝浦工業大	14 3	19 3
上智大	46 12	16 2
成蹊大	15 2	7
成城大	1	2
専修大	2 1	2
創価大	6 1	

私 立

大学略称名	現 役 合格 入学	過年度卒 合格 入学
中央大	27 7	21 4
東海大	2 1	
東京電機大	4	13 2
東京農業大	15	7
東京薬科大	5 1	
東京理科大	56 5	37 4
東洋大	7	10 4
日本大	27 5	22 2
法政大	33 4	24 4
星薬科大	2	5 2
武蔵大	3	13 1
武蔵野大	1 1	
明治大	99 23	56 5
明治学院大	6	4
明治薬科大	4 1	4 1
立教大	65 13	45 5
早稲田大	87 40	38 13
麻布大	1 1	1
同志社大	1	2
立命館大	3	6
関西学院大		1 1
その他	6	8
計	604 142	408 66

大学校・専門学校

大学略称名	現 役 合格 入学	過年度卒 合格 入学
防衛大学校	2 2	
東京工学院専門学校		1 1

※4月2日集計分まで

部活動報告(主な成績)

- 新聞部**
・県新聞コンクール準優秀賞
放送部
・「地方の時代」全国大会高校部門作品奨励賞
・県映像コンクール入賞
・非行防止ビデオコンクール優秀賞
- 吹奏楽部**
・埼玉県吹奏楽コンクールAの部地区大会銀賞
- 英語部**
・県英作文コンテスト奨励賞
- 地学部**
・地学オリンピック 日本大会最優秀 イタリア大会銀賞
- 音楽部**
・関東合唱コンクール金賞
・全日本合唱コンクール銀賞
- 古典ギター部**
・全国学校ギター合奏コンクール2011銀賞
- 弦楽合奏部**
・全国高校総合文化祭 出場
- 水泳部**
・県公立高校水泳競技会
100M背泳5位
400Mリレー6位
400Mメドレーリレー5位
- 庭球部**
・学総体県予選団体ベスト16
・新人大会団体県ベスト16(関東インドラ県予選出場)
- 卓球部**
・西部支部新人卓球大会学校対抗第3位
- 籠球部**
- 新新聞部**
・学総体大会県大会出場
・県新人大会4位
- 蹴球部**
・学総体大会県大会出場
- 柔道部**
・西部地区大会(団体戦)3位
- 弓道部**
・新人戦団体ベスト16
・全国選抜県予選 団体2位(関東枠代表決定戦出場)
- 陸上競技部**
・関東高等学校陸上競技大会
100M3位(全国大会へ出場)
110MH8位
3000M障害出場
・関東高校選抜陸上競技大会
3000M障害出場
1500M出場
- 排球部**
・学総体大会県大会出場
- バドミントン部**
・学総体大会西部地区予選団体6位(県大会出場)
ダブルス県大会出場
- 硬式テニス**
・学総体大会シングルス・ダブルス県大会出場
・関東県高校団体ベスト16
・関東東ブロック公立高校テニス選手権団体ベスト4
- SSH部**
・新人県大会団体ベスト16
・物理コンテスト全国大会銀賞
・全国SSH生徒研究発表会ポスター受賞
・県科学振興展中央展優良賞
・台日科学シンポジウム3位

川越中学校初代校長 増野悦興の謎(十)

滝澤 民夫(高18)

米国から帰国直後の1893(明治26)年秋、増野悦興は『基督教新聞』に5回、「新英洲」紹介を連載し、「彼等は自由、自治、自活、慈善、正義、敬虔の民なり」と記している。その地には学校、病院、貧院、孤児院、盲啞院、癲狂院、懲治院はいくまでもなく、書籍新聞館、出獄人保護会、窮民救助事業(施水、衣食施与、無銭浴室、貧民旅宿、新鮮空氣、小児虐待防遏、小児田舎移住会、婦化人子弟教育会、大学殖民会、禁酒会など多数)があった。これらの慈善機関の存在自体が「一大驚嘆の事実」であり、運営を担う人びとの慈



増野悦興肖像写真
1888〜89年頃に、新島襄に贈った。

(同志社大学新島襄保管庫蔵)



増野悦興と友人写真
安部磯雄(右)に寄贈した。

(左)は中瀬古六郎。
(早稲田大学史料センター蔵)

善的精神の前には「巍然としてボストン市の第一等街に踞まる、大慈善館も：光を失」う。増野の觀察ではこの自由、自治、自活、慈善、正義の念は「敬虔の民たるの事実」からするもので、新英洲民の「特質中の大特質」であった。家屋の高大、広壮の街路以上に、その「清教徒の良心」の顕著に驚いたという。埼玉県第三中学校(川越中学校)長就任の5年半前のことである。

*

では、この気鋭の牧師増野悦興はなぜ、中学校教師に転身したのか。「天職」との矛盾はどう克服されたのであろうか。

*

14歳の増野が同志社英学校に編入する前年の83年に、新島襄はキリスト教を広める方法には直接伝道と間接伝道があり、そのうち間接伝道の一つはキリスト教主義の新聞・雑誌・著書で、他はキリスト教主義の学校で、そこで広く奥ぶかい学術専門科を授け、広くキリスト教の感化力を及ぼし、真理のため、邦家のためには身命をもなげうって尽力する人物を養成することが必要だと語っている(『基督教皇張論』)。その後、新島は「同志社大学設立の旨意」において、「人民は一国の良心」であり、「立憲政体を維持するには、智識あり、品行あり、自ら立ち、自ら治むるの人民たらざれば能はず」として、同志社大学設立は「国家百年の大計」だとも述べている。官吏養成のための東

京帝国大学ではない人民養成の大学設立をめざしたのである。

亡き恩師の「遺訓」を引き継ぐとした増野にとって、教育者への選択は岐阜、金沢、川越での官立(公立)中学校教育は、新島の「間接伝道」の継承でもあったとみてよい。かつて石井十次が眼前の孤児救済を己の使命として岡山孤児院を設立したように、増野の内面では中学校教育は「国民教育の重要な点」であり、「中学教育の価値は教育を受く青年其人の価値に頭はる、もの」として位置づけられた。しかもそれは、私立学校とは違った制約のもとで、地方社会での「自治自修」教育の試みであった。そして、その官立地方役人とのいさかいが短期間で増野を教育界から去らせることにもなる。

キリスト教主義を前面に掲げた教育ではなく、校長としての増野が実践しようとしたのが「自治自修」の精神を「礼、節、質」ととらえ返した人格教育であった。第1回生の矢部謙治郎が「先生はキリスト教主義の人であるのですが宗教については非常に寛大な自由な人であつた」と回想し、岡田恒輔が「将来如何なる職業に就き如何なる境遇に置かる、にしても、常人たるの道を踏み誤らない人間らしい人間を造るを以て先生は教育の大方針」とされていたと記しているように、増野はニューイングランドで見聞した「自治自修」を方針に、宗教ではなく品格のある道徳による年少者の陶冶、つまり徳育による人間の育成に人格の完成を重視したと思われる。

の育成に人格の完成を重視したと思われ。

学友会『会報』記事によると、増野は講演「居と志」で、生徒と会員外の父兄ら72名を前に、「生徒を養育するにあたり、その自治自修を奨励する方針を執る」ゆえ、学友会は「生徒の自治自修の機関」であることを強調した。今日の生徒会ともいえるべき学友会の設立に際して、中学校教育の趣旨を次のように述べている。

「夫れ心身両者の發育を助成して、完き人を造るは、周く教育の目的とする所にして、忠愛の精神に富み、国民の本領を解し、優に社会の中堅となり得べき人士を養成するは、特に、我中学校教育の趣旨とする所なり、諸子の中、進んで高等の教育を受けんと志す者あるか、今より心して、異日成業の後、学問ある人士てう名に辜負せざらんことを勉めよ、退いて実務に就かんと欲する者あるか、進歩せる思想を、堅実なる品性の中に寓して、公事に任ぜんことを期せよ、礼、節、質の三徳は、我が校風の夙に標榜する所の三大校風にして、主義あり理想あり、卓然として世の輕浮なる風潮の外に立ち、邦家の進運を翼賛するの器を成さんこと、是れ諸子が最後の希望たらば、諸子の前途豈遑遠ならすとせんや」(会長の諭告)『埼玉県第三中学校学友会報』1号)

3年弱の期間ではあったが、初代校長増野の教育活動は「百事草創、僅かに中学の名ありて、未だ実なき有様」(会長の諭告)からはじまった職員と協働の基礎づくりであった。3クラス119名の生徒と校長を入れて11人の職員という小規模で発足した県立中学校であっただけに、尋常小学校を卒業したばかりの少年を志ある青年に育成する使命は増野に大きな夢をいだかせたといえよう。

予期せぬ休職であったためか、残された資料はごく断片なのだが、この間に次のような実績が確認できる。

- ①施設整備 校舎、雨天体操場、寄宿舎など
- ②中学校教育理念提示
- ③教育課程編成・授業・生活
- ④学校行事実施 遠足、修学旅行
- ⑤学則細則改正
- ⑥学友会設立
- ⑦生徒募集 県内各地域の小学校を回り、中学教育の意義を説く
- ⑧渉外 父兄懇親会など

教役者から教育者に向かうに当たって、新島のいう直接伝道から間接伝道への移行に際し、増野はできあがった大人よりも「活発雄飛の要素」をもつ青年教育に展望とこだわりを持ったといえる。

中学校教育にあたっての増野の教育方針は、①忠愛精神と国民本領の理解②健全な国民の育成、②自治自修③自律的市民の育成、③進歩思想と堅実な品性④近代科学に裏打ちされた民主的精神の保持、④礼、節、質の三徳⑤公德心の涵養、による人格の完成と読み換えることができる。

総会のご案内

日時 5月27日(日) 午前9時半より受付

会場 川越氷川会館(川越氷川神社内) 電話049-222-8417

総会	10:00~	3階・孔雀の間
記念講演	11:00~12:00	//
懇親会	12:20~14:30	3階・鳳凰の間
懇親会費	7000円	

記念講演

演題 「634(ムサシ)を目指して」

講師 吉野 繁氏(高31回)

株式会社日建設計 設計部門デザインパートナー

平成23年度分 終身会費納入の御礼

平成23年の同窓会総会において、同窓会会則の改正を行いました。終身会費については、これまで卒業後25年経過後、5,000円を納入することとなっていた会則を、25年経過後の部分を削除し、卒業後終身会費5,000円を納入することといたしました。

これは、平成23年度卒業生から、入会金及び終身会費合せ20,000円を納入することとの調整を図ったものです。

これにより平成23年度は、別添の会員、2,080人から総額10,261,790円を納入していただきました。

御礼申し上げます。

しかしながら、過年度の納入者を含めまして、3,693人で、会員総数の約14%です。

更に、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

なお、今回は既に納入して頂いている会員には、振込用紙は添付しておりません。

(参考) 過年度の納入者

平成14年度232人、15年度174人、16年度200人、17年度145人、18年度172人、19年度191人、20年度123人、21年度49人、22年度362人

「川高初雁の森」 構想

私ども川越高校同窓会は、活動テーマのひとつに地域貢献を挙げています。

埼玉県では、埼玉の森の再生と維持を目指す政策が推進されており、既に浦和高校では寄居の風布地区で「浦高百年の森」、浦和一女はその近くで「麗風の森」、熊谷高校は宝登山中腹に「熊高の森づくり」に同窓会事業として取り組んでいます。

川高同窓会も、「川高初雁の森(仮称)」づくりの準備を進め、今年度総会において皆さまでのご賛同を得て具体的な事業として推進する予定です。

1 名称 「川高初雁の森」

2 場所 飯能市名栗地区
有馬ダム右岸の山林

3 面積 1.5ha

4 期間 第1期5年間を飯能市より借用する

主な事業

・伐採、植林。下刈りなどによる森づくり

・同窓会OB・生徒がリクリエーションなどに活用できる森づくり

・SSHなど授業に生かせる森づくり

詳細は、HPで随時報告いたします。

事務局だより

叙勲授章等者

●平成22年秋

旭日双光章

原田雅義氏(中45・46)

瑞宝双光章

梅沢定彦氏(高4)

●平成23年春

旭日单光章

大沢正敏氏(中38)

旭日小綬章

伊藤義郎(中47・高1)

●平成23年秋

旭日中綬章

斉藤 博氏(高9)

瑞宝小綬章

橋本恭明氏(元・名誉会長)

瑞宝双光章

栗原和夫氏(高12)

瑞宝单光章

高橋重久氏(定16)

●平成23年度日本学士院賞

梶田降章氏(高29)

寄贈書著者等紹介

山崎 孝雄氏(高3)

『古典の遊び心』

田中 崇氏(高3) 監修

『印刷受注必携』

栗原 由郎氏(高21)

句集『こひゃんいおでいせよ』

滝澤 民夫氏(高18)

『基督教青年』(復刻版)

小泉功著作目録刊行会

『小泉 功著作目録』

編集後記

昨年の67号を受け取られて、前号との変化にお気付きでしたでしょうか。それは行数と字数を前号より少なくして、読み易くしたこととです。これは68号にも引き継いでいます。

さて、68号では特集に「同窓会の誕生とあゆみ」を取り上げました。私たちの同窓会はいくつ頃、どんな発想で生まれたのか。戦前、戦後を通じて、どのような推移してきたのか、お読みいただきたいと思います。

この特集に当たって、参考になったのは百周年記念誌『くすの木』でした。この記念誌は実に良く資料を調査収集し、きめ細かく編集されています。内容も豊富で、本校百年の歴史が年次毎に述べられています。

今号の表紙は、本校創立百周年記念事業で本丸御殿脇に設置した「川越城図」記念碑除幕の様子を写真で示しました。

記念碑は城郭を立体的に彫ったユニークな仕上がりになっています。一度ご覧下さい。

編集委員は次のメンバーが担当しました。(数字は卒業回数)

尾崎勝美(11) 伊藤 豊(2)

仲田勝己(定16) 菊池建太(17)

圓山壽和(17) 栗原忠男(20)

栗原由郎(21) 内藤 豊(21)

大澤 誠(26) 望月 勝(41)

福岡恵一(36) 岡部恒雄(15)